Osaka University Knowledge Archive

Title	川島慶雄名誉教授に聞く : 大阪大学の思い出
Author(s)	中尾, 敏充; 菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2011, 61(2), p. 57-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53781
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【資料】

川島慶雄[†]名誉教授に聞く

― 大阪大学の思い出 ―

中 尾 敏 充[‡]・菅　　真 城[‡‡]・阿 部 武 司[‡‡]

2010 年 2 月 1 日
於　大阪大学大学院法学研究科長室

学生生活の思い出

中尾　今日は川島慶雄名誉教授に，お忙しい中を来ていただきましてありがとうございます。最初にお渡しました質問事項について，お話をお聞きしたいと思います。

まず最初に，先生が大阪大学法経学部に入学されましたのは昭和 28（1953）年 4 月です。昭和 32 年にご卒業されていますけれども，この期間の学生生活で何か先生自身がご記憶に残っている，あるいはこういう学生生活であったというようなことも含めて，お話をお聞きできればというふうに考えています。

先生はその後，大学院に入学されていますので，同じく大学院時代のことについてもお話していただければと思います。かなり古いことになりますので，ご記憶されている範囲で結構ですので，よろしくお願いしたいと思います。

川島　はい。学生時代に何をしていたかと言うのは，それこそマージャンではないけれども，よく遊びましたね。遊んだ記憶しかなくて，1 年間は南校（大阪大学一般教養部南校），いわゆるもとの大高（旧制大阪高等学校）跡ですよね。これは僕の出身の住吉高校が近いので，しかも当時の住吉高校というのは阪大の予備校みたいなもので 100 人ぐらい入ったんですから。

中尾　そうなんですか。住吉高校。

川島　はい，理科系も含めて。だから友達がいっぱいいるわけですよ（笑）。それで遊んだ記憶しかないですね。ただ，南校というのは昔の大阪高等学校，いわゆる大高ですから，特に教養の間は大高からの先生がおられるわけです。

中尾　そうですね。

川島　農業経済の中島（千尋）という先生だったと思うが，授業の前に，朝，皆を集めるんです。そして大高寮歌を教えるわけです（笑）。だから大高寮歌は「ああ黎明（れいめい）」に始まって，いろいろ覚えましたよ。

あと，当時のわれわれの遊びというのは，それこそ野球をするとか，休講だったらマージャンをする。われわれよりもちょっと上の世代の人に聞くと，休講か何かになったら「エンデ行こうか」と言うらしい。それはどういうことか言うと，ドイツ語のエンデと言ったらエンドでしょう。エンドと言うのは宝塚線のエンドなんだ。というのは歌劇を見に行くという，宝塚歌劇を（笑）。われわれは全然そんなのはなかったけど，そういうことを先輩から聞いたことがあります。

あと学生時代の思い出というのは，いまと全然違うのは服装が違いますね。みんな学生は学

---

† 大阪大学名誉教授
‡ 大阪大学大学院法学研究科教授
‡ 大阪大学文書館設置準備室講師
‡‡ 大阪大学大学院経済学研究科教授

生服だし，1年と2年ぐらいは角帽をかぶっていた。襟のところに「J」というのを付けて。そしてセーターなどを着て行くと，武藤（智雄）先生というローマ法の怖い先生がいて怒られていましたね（笑）。

それと，僕はクラブ活動をわりに熱心にやっていた。ESS（英語研究会）です。それにISA（日本国際学生協会）というのがあって，外国の学生を招いて学生会議というものをやる。それの流れで僕は大学4年の時に，大学4年だから昭和31年7，8月に日本・マラヤ学生会議というのをやることにして，大阪外大とか神大，大阪女子大とかの学生7人で行ったんです。

日本から3,000トンの船で，東シナ海を木の葉のように揺られて，2週間かかって。当時マラヤ大学というのはシンガポールにあった。まだシンガポールが独立する前で，戦後初めての日本人学生だった。だから，シンガポールのストレイト・タイムズという新聞など大々的に取り上げてくれました。日本の新聞でも取り上げたけれども。日本の営林局でクスの苗木を寄付してもらって，マラヤ大学の庭に植えたのだが，いまこの所在を探しているんです。もう50年以上経っているから，育っていれば大木だと思うんです。しかしマラヤ大学というのは，その後クアラルンプールに移ってしまっているから，いまはシンガポールにはない。

この会議の実現のために，講義もさぼって一生懸命にやっていました。当時は向こうの招待でないと日本は出られなかった。外貨がないから。それでマラヤ大学の招待ということにもっていく。渡航費だけは，僕らが一生懸命にアルバイト。プロパンガスなどを売って稼いで，その3,000トンの中国の船で2週間かかってシンガポールまで行ったんです。

それで，その時の外貨。向こうの招待といえども小遣いはいるでしょう。換えてくれるのが20ドルだけなんです，7,200円。

そしてマラヤ大学で会議をやった後，クアラルンプールまで車で行ったんだが，まだ当時はゲリラが出没しているころで何回も検問された。そして，いまのマラヤ連邦の首相に当たるアブドゥル・ラーマンという人に日本人形をあげた。そういう記憶があります。これが大学時代の一番のイベントでしたね。

中尾　先生が法学部へ入られる動機というのは。

川島　これは，あまりない。僕は神戸大学へ行こうかと思っていた。僕のレベルからいってね。ところが神戸大学のほうが，ちょっと難しくて危ないと思ったわけです。神戸大学の経済だったのかな。それで阪大の法経にした。それからもう一つ，滑り止めというか，大阪外大も受けたんです。だから，あまり動機ははっきりしない。

そして1年してすぐに法経が分かれたでしょう。法と経に分かれるときに，成績はあまり関係なかったように思うんだが，どういうセレクションをしたのか，希望だけだったらどちらかに片寄ったらいけないしね。それがどうなっているのか，僕はちょっと知らないんだけど。

中尾　その時に完全に分かれて。

川島　分かれたんです。

中尾　入学年度で，その終了まで。

川島　そう思います。だから僕らは入ったのが一緒だから，いまでも経済の友達がいっぱいいて，今でも親しく付き合っています。だから法学部を目指したという積極的な理由はなかったと思います。

僕の父親は実は医者だったので，いまの医者だったら子どもも医者にしようと思うかもしれないけど，父は全然医者になれとは言わなかった。とにかく当時の医者は貧乏で，こんな貧乏になるんだったらかなわんと。僕も理科系は駄目だし，数学なんて一番苦手だったから。しかし面白いことに，阪大の入試で数学の成績が一番良かった。それで入った（笑）。

大淵仁右衛門先生のゼミ

川島　ただゼミは，僕は昔から英語が好きだったもので，ISAとかそんなのもやっていたし，外交官試験でも受けようかなと思う意思はあったから，国際法のゼミに入った。当時はよくわからなかったので，先生がいいと思って入ったわけではない。しかし結果的には，それが良かったとつくづく思っています。

菅　ゼミは3年生からですか。

川島　いや，当時は4年だけでした。また後でも言うけど，この大淵（仁右衛門）先生というのは，講義でも何を言っておられるかあまりよく分からない。これは大淵先生の記事があったかな。『阪大春秋』は知っていますか。

中尾　はい，知っています。

川島　『阪大春秋』に僕が書いた記事を，そこにちょっと入れてあるんだけど，秋田の出身でね。

中尾　ああ，なまりがあったんですか。

川島　うん，なまりがあった。その言葉は分かるんだけど，要するに訥弁（とつべん）なんです。訥弁というか，黒板へ，があっと丸を書いて，「これ，こうと違いますか」とか言うようなことだったから，講義はあまり分からなかったはずです。僕は大学院に入ってから2年間同じ講義を続けて聞いたから，それでやっと少し分かるようになったという先生でね（笑）。大学院に入ってからは，その先生には非常に薫陶を受けたということですね。

実質的には，文化勲章をもらった佐々木惣一先生の弟子なんですよね。京大ではないけれども。僕らから見たら佐々木理論というのも，これはまた難しい。あの人の日本国憲法論か何か最初にあるけれども，読むほうで努力しなければいけないということが書いてあるわけです（笑）。

しかし僕は，大淵先生というのは佐々木先生の一番の理解者だと思っている。あと，磯崎辰五郎先生とか，大石義雄先生とか弟子はおられたけどね。

大淵先生は非常に寡黙だし，足が悪かったから，いつも杖をついて石橋の坂をとことこと上がって来られました。いわゆる指導というものを受けた記憶がない（笑）。何をしろという人では全然ないから。自分の好きなことをやって，修士論文一つにしても自分で勝手に決めて，「これはどうですか」と言っても「はいはい，結構です」と。研究者になってからも，ちょっと論文の原稿みたいなのを「これどうですか」と言うと，「はいはい」と言うだけで，どこが悪いとか一つも直してくれないし，そういう意味でちょっと不満だと思っていたけれども（笑）。そういう先生だったね。

しかし『阪大春秋』にも書いてありますが，法律の概念の基本になるようなことをきちんと押さえている人で，ほかの分野についてもいろいろ。だから，大学院でも国際法の本ももちろんだけど，例えばモンテスキューの『法の精神』とか『Du Contrat Social（社会契約論）』とか，ドイツ語なんて民法の本を読むんだからね。それで大学院に入った時には，ドイツ語かな，分厚い本で「これをちょっと読んどきなさい。これを読むのに2，3年かかるでしょう」というようなもの。いまの学生は，そんなことはできないでしょう（笑）。

だから，これも余談だけど，僕は前々から修士論文なんてやめてしまったらどうだと。特に研究者になるような人は，もっとじっくり，もう単位なんて取らなくていいと。本をじっくり辞書でも引いて，苦労しながら読んだほうが将来役に立つんじゃないかなとひそかに思っているんだけど。今の時代，修士も必要なんでしょうね。

大学院では，大淵先生にはだいたい1対1とか，2人とかぐらいで講読などをやってもらっていた。あとは，瀧川（春雄）先生を中心に野球ばっかりです。瀧川先生の授業は年に数回

で，あとは全部野球。瀧川先生とか，刑訴（刑事訴訟法）の中武（靖夫）先生が中心でした。

それで僕は一度，大淵先生の部屋で１対１で本か何かを読んでもらっていたら，中武先生が入ってきて「大淵先生，誠に申し訳ございません。いまちょっと野球をやっておりまして」と，一番若い者がキャッチャーさせられるわけですが，「キャッチャーがちょっとおりませんので，川島君をお借りしたいんです」と。授業中ですよ（笑）。大淵先生も「そうですか，そうですか，ああ，どうぞ」と言って（笑）。

中尾　その時は院生の時なんですか。

川島　院生。そんな時代です（笑）。

中尾　院生は何名ぐらいいらっしゃったんですか。

川島　どれぐらいいたんだろう。全体で。

中尾　法学部。

川島　どうだろうな。そんな何十人もいないと思う。10 人かそこらじゃなかったでしょうか。

それで当時４大学野球というのがあって，ずっと 50 歳ぐらいまで僕と戸塚（登）さんがバッテリーを組んで，百何歳のバッテリーというころまでやっていたから。それで同志社と市大（大阪市立大学）と神戸大学とうちとが，春と秋に野球大会をやるわけですよ。

それから，修士が終わった時に僕は結婚したんですよ。それで家内に養ってもらっていたんだけど，博士の２年の時にフルブライトを受けていたんだけど，その補欠か何かになってね。そうしたら，その年からハワイにイースト・ウエストセンターができるというので，急遽募集するんだけど，まだ日本で独自の選考機関がなかったので，フルブライトを受けている人の中から希望者を募ったわけです。

フルブライトは原則１年。ところが，これは最初から２年行かせてあげますと。ハワイに１年，本土の大学に１年行かせてあげるということなので，それはいいじゃないかと，イースト・ウエストセンターの１期生ですよね。それでハワイ大学へまず行って，それから１年たってから皆があちこちの大学へ行って，僕はコロンビア大学へ行った。ニューヨークへ行きたかったから。本心は野球を見たかったわけだ，ヤンキースを。それでアメリカから来た学生は，アジアの各大学へ行くわけですね。

そして２年おりましたけれども，これも勉強せずに，当時，僕はフランス語にものすごくこっていて，学部の時の第２外国語はドイツ語だったんですが，フランス語を好きになって，博士の入試はフランス語で受けたのかな。それでアメリカへ行ってもフランス語の授業ばかり出ていた（笑）。本土へ行ってからワシントン D. C.。夏にサマースクールでジョージタウン大学のフランス語講座をとりに行って，フランス人の家に下宿して，フランス語を一生懸命にやっていて，将来フランスへ行こうと思っていたんでしょうね。

そうしたら，これはもう少し後の話だけど，帰ってから，また芦屋のフランス語学校へ通って一生懸命にフランス語をやっていたのに，ある時，中野（貞一郎）先生が来られて，中野先生は少し前にドイツのザールブルッケンへ行かれていたでしょう。ザールブルッケンの国際法のゲックという先生といろいろ関係があるから，「川島君，ドイツへ行きたまえ」と言う。ちょっと待ってよと。僕はフランスへ行こうとフランス語を一生懸命にやっているけど，ドイツ語はやっていない。「先生，ちょっと待ってください」と言って，１年間また大阪のゲーテ・インスティトゥートへ通って，それで今度はフンボルト財団の奨学生に応募して，1972 年にフンボルト奨学生としてドイツのザールラント大学に行ったんです。

学生生活委員

川島　それで，助教授になってからドイツへ行くぐらいまでの間，いつごろかな，もう大学紛

争ですよね。

中尾　そうですね。私が入った年ですね，1968年。

川島　どこかに書いてあるけれども，学生生活委員になったんだ。昭和54年だ。いや，これは帰ってからだな。学生紛争といったら，もっと前だろう。

中尾　前ですね。昭和43年，44年ですね。

川島　ああ，そうだ。ドイツへ行く前に，そうそう。だから学生生活委員に，これはもっと早くなっているんじゃないかな。一兵卒としてよく使われました。当時，学生がビラ配るから，それに対抗して学生生活委員会ニュースというのを書くわけです。あれを僕らが一生懸命に書いて，それで学生に阪大のゲッベルスと言われたんだけど（笑）。

それとか，図書館の上から見張っているんだ。それで，あそこの運動場の向こうからあやしい者が入ってきたら，うわっと走っていく。僕と基礎工の福岡先生とが走っていく。まあ，見張り役ですね。それから授業妨害の防止。みんな手は出したらいけないから，手は後ろに組んで，肩でこんなにして押していくわけだな。ああいうのは嫌だったね，肉体的接触は。

それから一度は，そこの正門の所へ。どこか外部からヘルメットかぶった一団が，こんなにしてスクラム組んで来ているわけでしょう。それを阻止しようと正門の前に教官が全部，ずらっと並んだ。あっという間に突破されてしまったけどね（笑）。ああいう肉体的接触は嫌だったな。釜洞（醇太郎）総長の時でした。釜洞先生も捕まって（笑）。

それから教授会。やがてはここの法学部，法経の棟も全部封鎖でしょう。その間は，当時の新大阪ホテルとか，教授会は大阪市内とか方々で転々とやっていましたよ。瀧川先生が学生部長だったから，瀧川先生の部屋なんてむちゃくちゃだった。それから中之島に本部があったとき。

中尾　松下講堂ですね。

川島　松下講堂。旧理学部の建物で，僕の国際法の初期のゼミはそこでやっていたね。

中尾　ああ，そうなんですか。

川島　そう，廃屋で暗かったからろうそくを立てて。そうしたらダニがいるんだ。古いほうってあった所だからね。その時，学生のほうの院生の，何かそういう自治会みたいなので一生懸命にやっていたのが松浦（好治）君だ。

中尾　その有志連合というあれですか。

川島　有志連合か（笑）。それで当時，民青（日本民主青年同盟）で彼らとやり合っていた堀田（文一）という男が，いま大阪府議会議員になった（笑）。だから学生生活委員会では，もういろんなことがあった。

中尾　その学生生活委員会というのは，やはり紛争を契機にして，それなりに重要性が増していくんですか。以前からですか。

川島　以前は何も知らないけど。そういうこともないと思うけど。

中尾　いまでも学生生活委員長というのは別なんですよね。

川島　ああ，そう。

中尾　ええ。おそらく，その当時ほど大変ではないと思うんですが，私もここの助教授になった時に生活委員をしまして，その時に，もう亡くなっていますが医学部の若杉（長英）先生が委員長をされていたので，いろいろな話を聞いたりすると，以前は大変だったけれども，いまはそんなことはないという。それでも，やっぱりかたちは。

川島　合宿なんかもしたしね。

中尾　そうですね。

川島　ただ，それの良かったのは，他学部の友達がたくさんできたということですね。いわゆる戦友です。戦友はいまも続いていて，面白いもんですね。これは非常にいいことだと。他学部の人と普段は交わることがないわけです。普通の委員会なんてたいしたことはない。寝食を

共にするぐらいなことをやったから。

それで当時，いまでも僕よりちょっと先輩だけど，蛋白研（蛋白質研究所）の中川八郎先生などと一緒にインターファカルティクラブというのをつくった。月１回ぐらい，要するにインターファカルティだ。理科系と文科系から１人の先生が話をして，ちょっとお酒でも飲む会をやって，何年ぐらいやったかな。だいぶ続いていたんだけど，それが学生生活委員会の副産物でね。

あとは，長期計画委員会というのも仲が良くて，元総長の熊谷信昭先生などが中心だったけど，その後，ずっと毎回旅行するんですよ。健康体育部の黒田（英三）君というのが僕の中学の後輩だが，いつも幹事で，毎年旅行をしてました。そのメンバーに久貴（忠彦）先生も入っているし，大久保（昌一）先生も入っていて，この先生，「大阪大学の思い出」（中尾敏充・菅真城・阿部武司「大久保昌一名誉教授に聞く－大阪大学の思い出－」『大阪大学経済学』第59巻第３号，2009年）にまじめなことを書いておられるが，大久保先生と一緒に旅行したら大変なんです（笑）。汽車なんか乗って車掌が来たら，「その帽子をちょっと貸してくれ」と，取ってかぶって，ほかの知らない乗客にもたくさんちょっかいを出す。「切符を拝見」とか言ってやっているわけ（笑）。だからバスにしようと，バスだったらガイドさんだけ守ってあげたらいいと（笑）。大変な旅行だったですよ。

菅　長期計画委員会のお仕事というと，吹田の地割りみたいなことをやっておられたんですか。

川島　そうだろうね。それははっきり何をやっていたのか覚えていないけど，長期的に，ここに何もっていこうかとか。

中尾　いまは施設マネジメント委員会と言っていますけれども。

川島　ああ，そう。そういうのをやっていましたね。

学部内では僕は，いまもあるか知らないけど，教務委員というのを８年間やっていました。当時，国立９大学教育課程シンポジウム。いまもやっているのかな。

中尾　いまは９大学法経学部長会議。

川島　学部長会議か。学部長会議というのは別にあったと思うんだけど。

中尾　ああ，そうですか。

川島　うん。それが毎年持ち回りで各大学で行われるわけです。だから９大学のうち８大学まで僕は行ったんだけどね（笑）。だいぶ長い間やらされたね。

研究について

川島　それから研究面では，これも大淵先生のヒントで，僕は国際機構とか個人のことに興味がわいて，後は主に難民の問題にかかわって，もう難民のことしかしないようになってしまったけど（笑）。当時はものすごく珍しかったからね。1970年代といったら，日本に難民なんていないし，おそらく日本でやっていた人はあまりいなかっただろうと思います。だから言葉も分からなかったですね。当時は「亡命者」と言っていた。英語で言ったら「refugee」なんだけど，それを亡命者。難民なんて言わなかったですよ。

それから庇護（ひご）という言葉があるんですよね。英語で言えば「asylum」という。これを今では庇護と訳しているが，1948年の「世界人権宣言」の中に「何人も迫害からの庇護を，「asylum」を他国において求める権利がある」と書いてあるんだけど，当時の外務省の訳で迫害からの「避難」と訳している。だから僕は最初の論文で何と訳していいか分からなかった，定まった訳がなかった。それで僕はそのまま「アサイラムについての一考察」と言う論文を書いています。いまは「庇護」でみんな通っているんです。

外務事務官に併任

川島　それから大学時代，助手，助教授の時代でちょっと大きな経験は，どこかに外務事務官併任と書いてあったと思うんだけど。

菅　昭和58年5月から7月までです。

川島　これはいまでもやっているけれども，いまはもっと期間が短いけれども，国連国際法委員会というのがあるんですよね。これは国連憲章の中にある「国際法の漸進的発達と法典化」という任務を行う国連総会の補助機関としてできているものですが，その国際法委員会の委員というのは国連での選挙で選ばれて，たいがい国際司法裁判所の裁判官を目指すような人の前段階としているわけです。昔は横田喜三郎先生もなっておられた。

当時，日本の委員はタイ大使の小木曽（本雄）さん。それで，毎年，学会から1人ついて行くというか，補助すると。それで，ほかの外務事務官も2人。当時は3カ月続く会議だった。いまはちょっと短くなっていると思うけど。それでジュネーブへ行ったのが，ちょっと面白い経験だったかなと思っているんですけどね。これまで慣習国際法であったものを成文化して条約化したり，これまで法的規制の無かった問題について立法を行うという作業を実際に見聞できたのは，とてもよかったと思っています。

中田厚仁君のこと

川島　それから，あとのその時代の大きいことと言ったら，国連のボランティアをしていた元ゼミ生の中田（厚仁）君がカンボジアの選挙監視中に亡くなったことですね。その時，私は家内が三重県の病院で手術をしていたので，僕は待合室でテレビを見ていたら，昼のニュースでぱっとそれが出て，うわっと思った。神余（隆博）君が国連課長か何かしていたので，すぐに外務省に電話を入れて，ちょっとつながらなかったんだけど，これもかなりショックだったね。

それで中田君が亡くなってから10年目にはじめてカンボジアへ行った。いま彼が死んだ所に彼の名前をつけた村ができて，お父さんがそこに小中学校もつくっている。そこへお父さんと一緒に行きました。シャヌーク殿下にもあいさつしてきた。それで，彼はだいぶいろんな影響を与えましたね。うちの家族にまで影響を与えて，うちの娘は国連ボランティアをやりたいと言い出し，会社勤めをしていた時だけど，会社に頼んで1年休んで，今度はモザンビークの選挙監視員に行っていた。

中尾　法学部の同窓会である青雲会が中田さんのお父さんを呼んで，総会で講演をしていただくことになっていたのではないかと思います。

川島　ああ，そう。あのお父さんも中田基金（中田厚仁記念基金）とかいうのをつくって，僕も一緒にやっていたけど，今はもう解散しました。

大淵理論

川島　それから僕は，やっぱり大学院に入ってから，また教員になってからも，大淵先生から受けた薫陶というものはとても大きかったと思っています。大淵理論は独特なんですね。学会なんかでも，ものすごく少数派と思うけど，非常に独自の理論を持っておられて，僕らもその影響を受けている。こういうことを言う人は，もう出てこないと思いますね。

それで僕は，この間，黒澤（満）君の最終講義というのに来て，ちょっと聞いてみて安心しました。僕は学問の継承ということは大事だと思うんですね。大淵先生が努力してやったことを，やはり引き継いでいかなければいけない。だから学会では，ほかの学校の先生から，僕らは大淵シューレ（大淵学派）と言われているわ

けです。だが，それは全然少数派というか，ほかの人に分からせる努力が足りないと思うんですね。大淵先生自身が，そういう表現力のほうで問題があるから。

もう一人，大淵理論をかなりよく理解した継承者がいたんです。それは民法なんだけど，常に大淵先生の所に来ていて，関大（関西大学）の教授になった。高橋三知雄君というのは知らないかな。ところが癌で早くして死んだ。だから僕らは大淵学説を継承する責任があると思っている。しかし，僕はあまりその責任を果たしてないけど。

それで黒澤君の話を聞いて少し安心したのは，彼も継承しているなと。黒澤君というのは大淵先生の一番最後のゼミ生だったんです。

阿部　すみません。大淵先生の理論のエッセンスを，素人に簡単にご説明いただけますか。

川島　ああ，どう言ったらいいのかな。国際法のほうでは独自の学説というのがあるんだけど，例えば，国家承認についての考え方とか，国際法の法源論とか，先生独自の考え方がある。

それは東大はそうでもないんだけど，京大なんかは田岡（良一），田畑（茂二郎）という両巨頭がいて，その弟子がものすごくいるわけで，その弟子の言っていることは，まったく一緒なんだな。それで教科書にも「田畑先生と共にこう考える」と書いてある。だから，それから逸脱するのは非常に難しいのではないかと思うんだけど，僕はその点，まったく自由でしたね（笑）。

つまり学問の作法とか，そんなものは大淵先生から一切教えてもらっていない。学会に入れとも言ってもらっていない。当時，うちに来ていた神戸大学の国際私法の川上太郎先生，その先生の斡旋で僕は学会に入れてもらったわけで，大淵先生はそういうことを一切面倒見ない。したがって就職なんかも面倒見ない。

大淵理論はどう言うのかな。難しいな。いわゆる多数説，通説が外務省の見解であり，政府の見解でもある。大淵理論はそれと大部違うところが多々あります。集団的自衛権なんて，僕は政府が言っていることは全然おかしいと思うんだけど，それは全部，もとは京大，東大の先生が言っていることで，もっと言うならば外国人が言っていること（笑）。

それから大淵先生は，憲法理論についても独自のものをもっておられた。例えば死刑は違憲だという大淵先生の説明。死刑は，いまは最高裁の判決で合憲ですよ。それはなぜ合憲かというと，問題になったその事件の時に死刑は残虐な刑であると言ったので，最高裁は残虐な刑ではないということで合憲だと言った。違う訴え方をしたらどうかと。裁判所は問われたことに対して答えるんですからね。大淵先生は憲法上，これは憲法を持ってきて話をしないとちょっと分からないけど，まったく別の根拠から死刑は違憲だと言っておられるわけです。そういう所は独自だけど，まだ一般には知られていない。

ああ，そうか。中山君が，かなり大淵先生の考えを受け継いでいると思います。もう辞めたが憲法の中山勲君。

それから，大淵先生の独自な所と言ったらどこだろうな。これは僕が後でも，学生に送るメッセージか何かで言うけど，これも大淵先生的な考え方だけど，例えば大学というのは教育機関かということ。古い考えですよ。大淵先生は違うと言うんです。大学の先生は教育者ではないと（笑）。つまり学校教育法のどこを読んでも，大学で教育しろということは一つも書いていない。研究と教授ということは書いてあるけれども，教育しろなんて一つも書いていないではないかと。

それで，われわれは教育者としてのトレーニングを何も受けていない。これは大淵先生が言ったことではないけれども，教育というのはまさに「今日行く」なので，今日ゼミに来てい

なかったら，その子の家へ行って「なぜ来なかったのか」というのが教育者。そんなことを大学の先生ができるはずがないと。

ところが世間では，いまはそんなことを言ったら通らない。通らないのは当たり前で，だから法と現実が乖離していると。いま一般に大学は教育機関で，大学の先生は教育者なんだと。しかし僕も大淵先生と同じで，僕は教育者だと言われたらしんどいなと思いますね。教育というのは全人格的な営みだから。やはり人格高潔でなければならない。大学の先生はみな人格高潔だと言われたらかなわないでしょう（笑）。

また思い出したら大淵先生のこと言うけど，それをいま言えと言われたら困るけど，例えば平等とか正義とか，みんなが分かっているようで，そのままほったらかしにしている，分かったように思ってそのままにしているようなことを先生に聞いたら明確な答えが返ってくるわけです。非常に基本の所，もっと言ったら法とは何かとか。だから学会でも嫌われる。学会で誰かが発表するでしょう。その時にうっかり「これは正義の観念によれば」と言うと，その人に「あなたの正義とはどう言うことですか」とか聞くわけです。そんなのを聞かれたら嫌でしょう（笑）。

だけど分からないことは，それが正しいかどうか知らないけど，もうえらいお年だけど商法の小橋（一郎）先生とか，民法の今は亡くなられた石田喜久夫先生とか，つまりほかの分野の先生がいつも研究室に来るわけです。僕もよく行きました。まったく拒まないし，しかも大淵先生はいつも部屋におられるんです。いまほど忙しくなかったからだと思いますが。

だから大淵先生が言われているのは，大学の教師というのは常に学生にアベーラブル（available）でなければいけない。学生がいつ行ってもそこにいると。その代わり，行かなかったら何の足しにもならない。行ったら何かかんか世間話なんてあまりしないけど，だから向こうも黙っているし，こっちも言うことがなかったら10分ぐらい両方黙って座っていることもある。それで何か思いついたら，ちょっと言う。先生のお宅へ行ってもそうなんだ。両方とも黙っている（笑）。僕も世間話だったらいいけど，世間話なんかもしないし。そうしたら奥さんは，ものすごくよくできたものでしゃべりはる（笑）。だから，うまく行く（笑）。

中尾　すみません，先生。去年の1月，上山安敏先生が法制史学会の近畿部会の新年会でお話しされたのですが，その時に，上山先生が京都大学の学生時代の時の先生方はどういう講義をされていたかという話をちらっとされたんです。その講義は，例えばヨーロッパ・ドイツで研究されている最新のものをされるというんです。それを聞くと，いまヨーロッパで何が問題なのかとか。だから先生がおっしゃったように，教育機関ではなくて，つまり自分が研究したものを発表するという。結局，先生たちの共通した特徴だというんです。

川島　そうそう。大淵先生もそう言われていた。大学というのは自分の研究したことを学生に発表して批判を仰ぐんだと。だから，それは教授・指導・研究をしろと書いてあるのであって，学校教育法には教育をしろとは，「教育」という言葉は出てこない。一カ所だけ「通信教育」というのは出てくるんだけど（笑）。

中尾　いまはそういうわけにいかないので。

川島　はい，それは無理ない。やはり大衆化しているわけで，僕が思うのは，教育というのが高校までで完結していないんですよ。教育が十分でない人が大学に来ているから，大学では教育しなければいけないようになってしまっているんです。本当を言えば，もう教育は高校までで完結してもらって，あとは研究のはずだった。学校教育法ができたころは。昔，おそらく戦前だったら，たぶんそういうことだったと思いますよ。

だから手取り足取り，ああしろ，こうしろと

言わなければいけないわけです。ああしたらいかん，こうしたらいかんまで言わなければいけない。僕は大学紛争の時，ここを封鎖された時に封鎖している学生と問答をしたんですが，学生が「先生はわれわれのために何もしてくれん」と言ったんです。その時に，はっと思った。やっぱりこの人たちは何かしてもらうことを期待しているんだなと。それで不満を持っているわけだなと気づきました。

大淵先生も言っていたのは，大学で教育があるとすれば，それは自己教育だけだと。われわれのほうが先生の研究態度等々を見て，自分を教育すると。それだったらあるけれども，手取り足取りの教育というのは大学ではない。そうでなければ，学生が遠足に行くと言ってもついて行かなければいけない，デモに行くと言ってもついて行かなければいけない。危ないことにならないかどうかね。

法学部長として

あとは何かな。「法学部長として」。これは何もしていないんです（笑）。法学部長として何か重点的にしたか，というと何も思い出せない。何もしていないからでしょう。先ほど，ここを聞かれたけど，人事はかなり促進したと思うんです。僕の時に中尾先生ももらい受けに行った。あと坂元（一哉）さんとか小嶌（典明）さんとか，野田（進）さん，真渕（勝）さんはちょっと違ったかな。野田，真淵は出て行ったけれども。それから去年退職した行政法の村上（武則）さん。

それから，いま入学式や卒業式にガウンを着ていますが，あれは僕が学部長の時だ。学部長会議の時に。

中尾　その時に，それを決めたんですか。

川島　うん，決めた。僕はあんなのはちょっとどうかなと思ったけど，熊谷先生だったか，金森（順次郎）先生だったかな。総長が決められて，皆が「うーん」と言っているから，やっぱりあかんと言われたら困るだろうなと思って，僕は「いいんじゃないですか」と言ったんです（笑）。それで松岡（博）君がモデルで着て歩けとなって，あまり格好はよくなかったが，まあよかろうということになった（笑）。そして今度は学部で襟の色を決めるという時に，最初に法学部はワインレッドだと言って，いまでもワインレッドか。そうでしょう。早いもん勝ちだと言って（笑）。

国際交流委員

川島　それから学部長の時ではないけども，学部内では国際交流委員というのを僕はものすごく長いことやった。

中尾　全学で。

川島　はい。その関係で，国大協（国立大学協会）の第５常置委員会という所は国際交流を扱う委員会で，ほかの人はみんな学長だけど，普通の教員が２人か３人ぐらい入っているので，それに入れられた。それで巻き込まれたのが，どこかに書いてあるUMAP（アジア太平洋大学交流機構）というもの。いまでもあると思うんだけど，どうやっているのかな。

中尾　４ページ目の下のほうですね。University Mobility in Asia and the Pacific.

川島　そうそう。台湾でも総会があったが，江崎玲於奈さんが委員長をやって一緒に行って，それから一度はオーストラリアの各大学をずっと回った。要するにアジアの大学間で学生を交換しようと。ヨーロッパにはエラスムス計画というのがあって，それでやっている。アジアはなかなか大変なんだけど，それをやろうというので巻き込まれて，一度日本でやるということで阪大が引き受けさせられました。それをだいぶやりました。

中尾　これはいまでもあるんですか。

川島　いまでもやっていると思いますよ。

中尾　いまはわりと交流，大学生に対して。

川島　今は各大学でそういう協定をすごく作っているから。しかし，実際に機能しているのはあまりないのでは（笑）。Dormantというか，眠れる協定が多いですね。

中尾　エラスムスは文学部を中心にやっているんですね。

川島　ああ，そう。やっぱり単位を互換して。しかし，それをアジアでやると言っても，日本へ来る人はあるかも分からないけど，日本から例えばタイへ行くとか，これはなかなか難しいと思うんですよ。もちろん言葉の問題もあるし，専門によって，タイへ法律の勉強に行くという人は，あまりいないですね（笑）。だから，それはなかなか難しいですよ。

講座の増設

中尾　これを見ますと，先生の時にアジア法政論ができているんですかね。

川島　そのアジア法政論は何かな。講座。

中尾　講座ですね。小講座が，平成3（1991）年。

川島　アジア法政論というのは誰がそこに。

中尾　西村（幸次郎）先生。

川島　早稲田の西村さんね。

中尾　その前に久貴先生の最後の時か，ロイヤリング（法曹実務特別講義）開講というのがありますね。

川島　ああ，ロイヤリングね。

中尾　あと比較憲法論の講座ができていますね。

川島　文科省へ何回か行ったのは，その時かな。やっぱり国際公共政策だと思うけどね。それは，おそらく2年ぐらい前から準備しているから，学部長の時からやっていると思うんですよ。

国際公共政策研究科の設立

川島　文部省へは，2学部が一緒になって大学院をつくったらどうでしょうかというような話で行ったのかな。一度，局長ではないけど上の人と話したら，「下の者はいろいろなことを言いますけれども，お考えの通りどんどん進められたらどうですか」と上の人は言ってくれる（笑）。下に行くほど文句を言われて，細かいことにね。

だから学部長としては，そんなに行っていないと思う。しかし学部長の頃から始まっていたから，これは何年だろうな。平成。

中尾　6年ですね。

川島　6年。僕の記憶ははっきりしていないけれども，最初はやっぱり4年ぐらいだったと思う。金森（順次郎）総長が言いだしたというか，最初の話は経済と一緒に何かできませんかというような話だったと思います。

金森さんは現代の時代に合った学際的な独立大学院をつくるのが良いというふうに思っていたのでは必ずしもないと思う（笑）。建前は，そういう建前でその後も行くんだろうと思うけど，本音は教養部問題だと思うんですよね。

それで経と何かできませんかということで，蝋山（昌一）さんの所へ行って，総長がこういうふうに言っているけどと言ったら，いや，もう経はよろしいと（笑）。つまり一緒になって何か新しいものをというような話だけれど，経は独自できちんとやっていけますと言って消極的だったわけですね。しかし，どの段階かからは変わったけどね。一緒にやろうという話になったけれども，最初は経は経で独自で立派にきちんとやっていくと。

その辺も，ちょっと微妙なところでしょう。だから少なくとも，この時代にあった学際的な，要するに国際公共政策というのは国際社会が全体として取り組まなければならない問題，例えば安全保障とか，人権，環境，貧困とか，

そういうすべての国家がかかわり合っているような問題を経と法の両面から研究し，やっていこうということでしょう。そのためにつくる。

そして，あれがあったじゃない。もう忘れたけど，「法律に詳しいエコノミスト，経済に強いロイヤー」とかいって，そういう人を育成するということがキャッチフレーズで，最初は国際公共システムという名前で文部省へ持っていった。そうしたら，文部省で「国際公共システムというのは，どんな辞書を引いても出てきません」と言われたわけです（笑）。

もともとうちでは公共政策にしようかということだったけど，うちというか，むしろ経済がそう言ったのかな。野村（美明）君などは公共政策というのが，法の考えている意味と，経の考えている意味では違うとか何とか言っていたと思います。それならシステムにしよかということで，システムで持っていったんだけど，どこを見てもそんな言葉はないと言われて，しようがないから公共政策でいきましょうと。これは蝋山さんが大阪スクールというので，“Osaka School of International Public Policy” と。Ｇを付けたらゴシップ（GOSIPP）だと言ってね。ちょっとスペルは違うけどゴシップだと言っていましたね（笑）。

阿部　現在では国際公共政策という名前は大変ポピュラーになっているようで，専門職大学院の名称にもなっています。いまは京大などでも使われるようになりましたが，私が最初に聞いた時は非常に耳慣れない言葉だと思いました。先生方が試行錯誤しながらお作りになったそれが，十数年のうちに日本全体で公認されたということですね。

川島　不思議なものですね（笑）。それは，しかし僕というより，むしろ蝋山さんぐらいが考えたのではないでしょうか。

中尾　経済に公共経済学という講座がありましたよね。法律の場合は政策というのはあるんですけど，確か法政策学というのがあったかと思います。この前も大学評価・学位授与機構の認証評価で国際公共政策研究科があり，また法学研究科のほうにも公共法政というプログラムがありますが，経済も何か。

阿部　経済学研究科では，専攻の一つとして政策専攻があります。それと国際公共政策，公共法政の三つがどういう関係なのかが認証評価で問題にされました。そこでは，「法学研究科での政策論はともかく，経済学にかかわる国際公共政策と政策との違いが分からない。違いがあるとしたら，むしろそれをはっきりさせて棲み分けを明確にしたほうがよろしい」というコメントあるいは批判のようなご指摘を受けまして。

川島　いやいや。だから僕らも名前を付けたものの，それを定義しろと言われたら。僕も，できた少し後で神戸大学の阿部さんという行政法の人が電話をかけてきて，「国際公共政策というのはどんなものか，ちょっと教えて」と言われたから，「知らん」と言ってね（笑）。

中尾　確かにこれは，いまでこそ阿部先生がおっしゃったように，すんなり定着しましたけれども，最初はやはり大変だったでしょうね。

阿部　私も確か最初，国際公共システムという名前になりそうだと聞いたあとで名前が変わったことを思い出しました。

初代研究科長

川島　それで，なぜ僕が研究科長になったかというのはよく分からないんだけど，それは準備委員会で決められた。

僕は，この初代研究科長と言われて，僕は初代というのに，ものすごく縁がある（笑）。まず僕は国民学校１期生なんです。昔は尋常小学校に入ったんだけど，僕は小学校に入った時に肺炎になって，親が１年休めと言って，休んで，そこで１年遅れているんです。早生まれだけど遅れて。そうしたら，次に国民学校１期

生。そして終戦後は新制中学１期生。法学部もある意味で１期生みたいなもの。それからOSIPPでしょう。そのすぐ後，帝塚山の法政策学部をつくったから，これまた１期生。そして同時に国際交流基金関西国際センターというのができて，それの初代所長で１期生。帝塚山を辞める１年前には千里金蘭大学というのを４年制でつくりますから，それも１期生。１期生は気持ちがいいんだけど，もう後は知らんと言って（笑）。

いきさつはそういうもんですね。特色も，公には先ほど言ったようなものです。しかし，非常に感じたのは異文化の共生ということでしょうか。異文化というのは，やはり法と経も異文化ですね。それから教養も異文化。特に事務は教養の事務が移行したから，あれはどうも異文化だった。

それで経の人は，一緒に研究科委員会をするでしょう。法の人は基本的にうるさいという感覚があるんだな。だから研究科委員会でも法はうるさいでと。ところが全然逆なんです。法はおとなしい。経は蝋山，本間（正明）とか，うるさいのがいっぱいいるわけです。林（敏彦）とか（笑）。よほど経のほうが論客が多くて，松岡君なんかも入っていたけど，こっちはみんなおとなしい（笑）。やはりだいぶ法と経の文化は違うね。もちろん私学に行ったら全然違うでしょう。同じ私学でも，帝塚山もまた違うし，金蘭も違う。私学へ行ったら，やはり事務系の力が強いから。

それで一番苦労したのは，法学部内部との調整だったと思います。あなた（中尾）もそのころ教授会に出ていて，ご存じと思うが，かなり反発が強かったわけでしょう。それで，法からも何人か出て行く，特に当時は小講座制。僕も立場上講座を出さなければいけないと思いました。僕も内心非常に残念に思った。ずっと，いままできた国際法講座が無くなるということについては，大淵先生などに申し訳ないと内心思っていたけど，そういうことでなくても，一般的に，なぜあんなに異論があったのかな。

それで，当時僕らが一生懸命に説明したのはバルコニー論というのだった（笑）。法から出ていくのではなくて，法と経の外に共用のバルコニーを作って，法も経もそれを使って外へ出て景色を見ろと言ったんですね（笑）。黒板に書いて説明しましたよ。あの辺が何かちょっとしんどかったですね。

中尾　そうですね。確か私が平成４年に移ってきた時ぐらいに，すでにこういう教養部改組のお話があったんだと思いますけど。川島先生が報告された時に，３回目の案というかたちで説明を聞きました。

川島　ああ，そう（笑）。何を言ったのか覚えていないけど。

しかし何とか実現したが，その年は予算成立が遅れて，ちょっと困ったなと思ったけど，ともかく４月終わりぐらいに入学式をやったと思います。非常に面白いことは面白い。多様な人材が来たから。つまり法と経の出身者だけではなくて，京大の農学部とか，企業の鴻池組とか，そういういろいろな変わった人間が来て，講義の後でも，あるいはコンパでも，親子ぐらい歳の違う人といろいろ話ができるし，そういう意味では出身・年齢問わず多彩な人が来てくれて面白かった。

だから，もちろん面接中心で，研究計画等についての面接だけど。僕がその時に一生懸命に言っていたのが，当時の体操の採点では，テクニカル・メリットとアーティスティック・インプレッションというのがあった。僕はテクニカル・メリットはもうよろしいと，アーティスティック・インプレッションで取ってくださいと。つまり，いままでの学問的な知識というようなものは，まあまあにして，それよりも，この人は将来的に伸びるかどうか，そういう基準で取ってくださいということを言ったような覚えがあります。それは帝塚山でも面接重視で，

いつも言っていたんですが。

OSIPPは初めからそういう面接重視できたけど，帝塚山でもなるべく，ペーパーテストというのは顔が見えないから，本当に教えたい人に来てもらいたいということで，それはやはり顔を見て選べと。そうすると，それでは試験官によって基準が違うのではないかとか，基準が一定しないではないかという議論があるわけです。それは僕は構わないと。試験官も教員だから，ある程度の基準の共通性はある。その下で，その人がいい，こっちの人がいい。それぞれの判断は違っていても，むしろ多様な学生が来てくれた方がいいんだと。

しかし，面接というのは高校からはものすごく評判が悪い。つまり高校の成績のいいのが落ちて，悪いのが入るんだから。また帝塚山の偏差値が下がるとか言いだす人もいたわけです。しかしその後，皆さんに努力してもらったから，きちんとなって。

それから千里のエクステンションね。あれも，蝋山さんなんかが考えてくれたと思うんだけどね。あそこでも授業できるようにして，夜もできるようにして。いまでも使っているのかな。

中尾　確か使っていると思います。

川島　まだ，あることはあるみたいだけどね。

中尾　松繁（寿和）先生が言われていたと思うんです。以前は確かによく使われていましたね。

川島　土曜日は，そこを使っていましたよ。

国際公共政策研究科の展開

中尾　先生は初代の国際公共政策研究科長になられて，その時にイメージされた，将来的な国際公共政策研究科がこうなるだろうという見通しと，現在15周年を迎えているわけですが，この間を比較した場合にどういう感想をお持ちでしょうか。

川島　いまはニュースレターや雑誌ももらっていて，非常にしっかりやっておられると思います。最初に考えていたとおりになっているかどうかは，ちょっともう一つ分からない面があるが，学際的な面は進んできているように見えますね。

しかし初めは，そんなにうまくはいかないと思っていた。みんなやっていることはばらばらなんだから，そんな国際的に共通の関心がある問題について，法と経からというようなことには，いきなりはならないと思っていましたよ（笑）。それは建前の部分が大きいと思っていたようですね。しかし，だんだんとそういうふうになってきている気がしますね。それは新たな人材も入れてきているんだからね。そう急にはなかなか行かんと思うけれど，目的は徐々に達成できているのではないでしょうか。

中尾　修了生なども，いろんな所で活躍されていると思うのですが。

川島　非常にいろんな所でね，女子学生でもアフリカとか国際的ないろんな場所で活躍している。一度，僕は何年かたってイギリスのほうへ行った時に10人ぐらいいた。それで同窓会をやるからロンドンへ来いと言って集めたことがあるけど。

中尾　それは何年ぐらい前ですか。

川島　もう10年ぐらい前じゃないかな。もっと前かな。

中尾　いまはされていないんですか。先生が面倒を見られた卒業生の集まりみたいなものは。

川島　集まりはやっていないですね。

中尾　同窓会自体は毎年されているんですか。

川島　同窓会は，僕は案内をもらっていないと思います。

中尾　そうなんですか。

川島　はい。案内をもらっていないと思うけど。やっているとしたらね。

中尾　やっているのではないでしょうか。ちょっと僕も最近は協力講座をやめているの

で，わかりませんけど。

川島　僕はもらっていない。数年前に１回，ここで何かをやった。あれは同窓会とは違ったと思うけど，何かの会がそこの食堂で，数年，もっと前か。7，8年前に１回来たことがあるけど。例えば年に１回，同窓会総会とかがあるとしたら，それはもらっていない。知らない。

僕自身，OSIPPでは重点的に何かに取り組んだという記憶はありません（笑）。しかし研究指導は一生懸命にしたというか，いまになっては，ちょっと悪かったかなと思うけれど，もう修士論文１年待てとかやりましたから（笑）。

いま考えたら，やっぱりもうちょっと人には，後で見たらそんなに厳しくするというのはあまりいいことはないと思っています。僕は法学研究科だけど，中国の留学生の女子２人を落としたというか，１年修士論文を待たせたことがあります。そうしたら泣かれてね。ビザとか，いろいろ事情があるでしょう。いまになってみたら悪いことをしたなと思うんですが。あんまりいいことはないですね。

外務省からの教員の招聘

中尾　外務省からの先生の招聘というのは，もう先生のころは始まっておられたのですか。

川島　あれは僕が最初に考えて，当時まったくそういうことはやっていなかったらしいんですよね。

中尾　そうですよね。

川島　阪大が初めてだと思いますが，僕は神余（隆博）君の来る数年前から，最初は人事課長をやっていた谷内（正太郎）さんというのがいるんですよ。最後は次官になったけどね。その人が人事課長の時，藪中（三十二）君がジュネーブにいたころに彼にも手紙を書いて，出向みたいなかたちでうちへ来ないかと。それで谷内さんにも話をして，そういう出向というかたちはあり得ると。しかし，藪中君はちょっと支障があって駄目になった。それだったら，その次に神余君をと。

神余君でも，もちろん一番困るのは，ここへ2年来た結果いいこともあるけど，その間，外務省としての昇進に差し障りになるということではいかんというと，それは大丈夫だということでね。

中尾　神余さんがこちらへみえた時は，まだ国際公共政策研究科は立ち上がっていない時でしたか。立ち上がっていましたか。

川島　彼は国際公共へ来たのかな。法学部へ来たのかな。

中尾　法学部へ。

川島　だけど最後はOSIPPのはずですね。

中尾　そうですね。

川島　うん。

阿部　最初の立ち上がりの時は神余先生がおられたような気はしませんね。

川島　いやいや，確か。

阿部　私の所（経済学部）では，OSIPPに移られた先生方は立ち上がりの時に，しばらくの間，経済学部と両方でというかたちになっていた気がするのですが。

川島　神余君は立ち上がった時は完全に国際公共政策なんですよ。それでその前は，採った時は法学部だったかも分からない。

阿部　そうですね。確か採用の時に一時期，席がないというか，発足の準備をしなければいけないけれども，発足と同時に着任というのが難しくて，移行期間みたいなものが短い期間ながら必要だったので，それぞれの学部に先生方がいったん所属するというかたちになっていたのではないでしょうか。

川島　うん，そうですね。

それで来てもらって，それから続いて，ほかの大学もちょっと始めたりしましたね。神余君は今ドイツ大使をしているが，彼の後にベルリン総領事をしていた津守（滋）さんに来てもらった。

中尾　その後少しおいて，姫野（勉）さん。

川島　ああ，姫野君は，もっと前から来たいと言っていた。

中尾　確か多胡（圭一）先生が研究科長で，私が評議員をしている時に，外務省からの候補者にあがっていたように思います。

川島　最初は外務省があかんと言っていた。

中尾　そうなんです，ちょうど内閣府の忙しい係をされたので。

川島　うん。それでシンガポールへ行かされた。それで彼は，ずっと望みだったから，やっと来られてよかった。姫野君の後は，もういまは来ていないでしょう。

中尾　そうですね。本省からというかたちは。

川島　それから，一つ言ったのは，外務省のいらん人をくれるなと（笑）。そんなのも前から言っていたんだけどね。外務省で邪魔だから阪大へと，それは困るでと言っていた（笑）。

阿部　藪中さんや小和田（恒）さんも国際公共政策研究科に来られましたよね。

川島　そうです。

阿部　そうした方々は，先ほどお名前の挙がった先生方とは，別の扱い（と言うと失礼ですが）だったのでしょうか。

川島　小和田さんというのは藪中君と同じような，要するに非常勤講師みたいなかたちですよね。客員教授とかいうような，藪中君が最初に来てくれていたような形ですよね。

阿部　大阪大学にあまり頻繁に来なくていいわけですね。

川島　そうそう。

阿部　姫野先生の場合は。

川島　これはもう常勤です。

それで小和田さんのいまの雅子皇太子妃は，藪中君の下にいたわけです。北米二課におられたわけだ。藪中君が二課長のころに。結婚されてからも藪中君は東宮へ呼んでもらったらしいですよ。2人で話をするんだけど，どう呼ぶんでしょうね（笑）。

僕もちょっとだけ外務省におられたころを知っているんだけどね。それから皇太子妃になられてからも2度会っています。「世界青年の船」ってどこかに書いてあったと思いますが，僕が停年の時の。これも僕にとっては一つの大きなイベントで，平成9年かな。2カ月間で太平洋を1周したんだけど，出発前に13カ国の代表を連れて東宮へ行って，皇太子殿下，同妃殿下にごあいさつする。

その時に1回と，それから国際交流基金関西国際センター。これは皇太子御成婚の時の補正予算か何かでできている。だから一度来られました。それでお出迎えをして，大阪府知事が横山ノックの時だったけど。

ところが，あの時はすごいよ。もう何カ月も前から施設の下調べ。それから所長，僕の履歴書を出さなければいけない。なんでや，普通は来る人が履歴書を出すのとちゃうかと言ってね（笑）。それから，言うことは全部宮内庁の指示どおり。だから車が着くでしょう。それで僕が車の前に行ってドアを開ける。そうしたら普通は「よくおいでいただきまして何とか」とあいさつするでしょう。ところが，そんなことを言ってはいけない。「所長の川島でございます。ご案内いたします」だけ。お見送りの時は黙って頭を下げるだけ，と指示されました。

中尾　言葉を発したら駄目なんですか。

川島　そう。だけど殿下が帰り際に言われたわけです。「今後とも，センターのご発展のためにいろいろご努力ください」と。こちらも何か言わなければいけないでしょう。準備していないんだから，「ははあ，ありがたいお言葉をいただいて」（笑）。

中尾　そういうときは応答してもよろしいわけですか。

川島　しなければしようがない。横に宮内庁がいるわけではないから。冊子があって，それに従ってご案内する。分きざみでセンター内をご案内するマニュアルが作られているんです

（笑）。

それで，だいいち頭の下げ方の角度なんて分からないんです。僕は帝塚山で，昔，自衛官していた人が事務にいて，「皇室の人に頭はどのぐらい下げんの」と聞いたら，「皇室と死者は45度」と言われた。45度と言ったら，かなりしんどいんだよね，おなかが出ているから（笑）。それで，また分からないのはエレベーターに乗る時だ。もちろんエレベーターには先に乗られるでしょう。殿下の方へ向いて乗るのか，お尻を向けていいのか（笑）。困りましたね。

しかし，僕が感心したのは，皇太子は自分から話をされる時でも，相手の話を聞く時でも，絶対に目をそらさない。こっちの目をじっと見て，僕はあれは訓練されているんだと思う。東洋の文化は目をそらす文化でしょう，だいたい偉い人の前では。韓国なんか絶対そう。見たらいけないんだからね。

中尾　そうですね。

川島　やはりヨーロッパの文化は目を見て。ドイツなんかではスーパーのレジでも「ダンケ」と，ちゃんとこちらの目を見て言う。日本のスーパーだったら「ありがとうございます」と言って下を向いている。目を見る文化と見ない文化の違いだと思いますね。

いらん話をして。まあ何もやっていないね，研究科長としては。

研究科立ち上げの留意点

中尾　その立ち上げの時ですが，こういうところに気を配られたというんですか，あるいは留意されたというか，つまり国際公共政策研究科を立ち上げた初代の研究科長ですから，それなりに学生に対してとか，教員に対して，先ほどのお話ではいろんな人が。

川島　そうそう。学生はね。だけどやっぱり教員・事務の間の融和でしょうね。やっぱり，皆さん独自の文化を背負っておられる人だから，異文化理解を促進して，みんな仲良くやってもらわなければいけないので。例えば法の先生と経の先生が対立されたりしたら，どうにもならない。ただね，やっぱり幸いなことに，僕は経の先生にいっぱい友達がいたからね。昔からの遊び友達が（笑）。

本間（正明）さんも，あれは急遽呼ばれたんでしょう。最初はOSIPP要員ではなかったんです。

中尾　そうですね。

川島　ロンドンにいたんですね。ロンドンにいた時に電話で呼び出して。

阿部　長期出張中に，急遽移られることになって。

川島　そうそう。本間さんにもだいぶ言われたよ，阪神淡路大震災があったから，その対応を。その対応はもちろんすごく大事だったけど。また，例えば最初，教養の事務だろう。だからOSIPPのほうの，例えば封筒一つなかったわけです。教養の封筒に判か何かを押してやっていたんです。それを本間さんが怒ってね（笑）。

それから次は，これは法と経で研究科長を交代にしていたからね。だから，それは経済の事情だと思うんだけど，次は僕は蝋山さんかと思ったけれども林（敏彦）さんになったんですね。蝋山さんが辞退したのかどうか知らないけど。

中尾　蝋山先生は研究科長をされていないんですか。

川島　彼はしていない。僕の後が林さんで，その次，法に戻った時は誰だ。森本（益之）さんはやったかな。林さんの後，誰だったかな。黒澤かな。

中尾　そうですね。

阿部　辻（正次）先生がやっておられました。

川島　辻さんはやられたね。僕が辞めてからだと思うけど。

阿部　野村（美明）先生は辻先生の後じゃなかったですか。

川島　そうそう。黒澤，辻，野村か。

阿部　それで高阪（章）先生。

中尾　高阪先生が3年やられたんですね。

川島　ああ，そう。

中尾　2年で，あれは外大統合の関係ではないですかね。それで1年。だいたいあの時は，法研もそうでしたけどロースクールを立ち上げるということで，結局，中でまとまっていかないといけないと。票が分かれたりすると大学に法はまとまっていないと思われてしまうから，それで多胡先生にお願いしてやったんです。わりとあの時期は票が割れる可能性がありました。

川島　高阪先生はなかなか良かった。

中尾　それで，その後は床谷（文雄）さんで，松繁（寿和）さんですね。基本的には法と経が交互に。

阿部　交代にやっておられますね，考えてみますと。

川島　松繁さんは姫野君の友達だった，学生時代から。

対外的な活動について

中尾　あとは，先生はいろいろと帝塚山とか金蘭のことも書かれていますので。

川島　金蘭については言うことないですね。学会は研究連絡主任というのを1回やって，その時は。

中尾　帝塚山でですか。

川島　いや，学会の中でね。庶務と会計と，研究連絡。つまり次の学会のテーマとかを決める。それはいろいろ，特に僕の時はわりあい外部の人を呼んできました。元国連大使とかUNHCR（国連難民高等弁務官）の人とか。その他は，国際法協会，ILAというんだけど，これは2年ごとに世界大会があって，ずいぶんいろんな所へ行きました。

そこの難民部会の委員をしていて，それがまた大会の中間に会合があると言って呼び出されたりしました。韓国ソウルに始まり，ワルシャワ，ブエノスアイレス，カイロ，オスロなど，5，6回行きましたね。

それから後は，国際交流基金でも毎年，外国の日本語の教育施設を訪れた。日本語普及ということも交流基金の一つの目的で，世界中で行われている日本語検定試験も受け持っていましたからね。ここ10年位の間に飛躍的に日本語学習人口が増えて来ました。いま世界で300万人位でしょうか。日本語学習者の数はどこが一番多いか知っていますか。

中尾　中国ですか。

川島　中国は最近2位になったかな。圧倒的に韓国です。

中尾　ああ，韓国。

川島　韓国は100万人を超えているんじゃないかな。中国が30数万人ぐらい。以前はオーストラリアの方が多かった。全部で300万人としても，それでもドイツ語の10分の1なんです。

中尾　10分の1ですか。

川島　はい。フランス語はもっと多いと思います。英語はもちろんですが（笑）。

それをいろいろ見に行く，また元研修生に会いに行くのと。僕が所長になってから一番力を入れていたのは，アフターケアですね。関西国際センターというのは外交官，公務員，研究者に対する日本語研修は長期で10カ月か何かやるんです。あと大学院生，大学生，高校生とか，日本語成績優秀者などでいろんなプログラムをやっているんだけど，少なくとも長期で帰った人には，アフターケアというのが僕は大事だと思っていました。場合によっては，もう1回呼んであげるぐらいのね。

それで，これは主にODA予算でやっているわけです。ODA予算というのは，どんどん削られるから，だんだんプログラムを縮小しなければいけないんだけど。いろんな国へ行った時

に元研修生を集める。一種の同窓会みたいなのをそこでやる。ベトナムのホーチミンへ行った時には，まただいぶ集まってくれて，これだけ集まるんだったら関西センターの同窓会をここで一つつくってくれないかと言ったんです。そうしたら日本大使館の人も来ていて，後で「先生，それはちょっと駄目なんです。結社の自由がないんです」と（笑）。今は事情は変わっているかもしれませんが。

中尾　ああ，そうなんですか。そういうものですか。

川島　（笑）。ベトナムへ行ったことはありますか。僕は世界でも珍しいと思うけど，ハノイの郊外に，いまだにレーニンの像がある。これとキューバにもある。こうして懐へ手を入れている。さすがレーニンだな，異国では財布をちゃんと押さえとるなと（笑）。

ずいぶんいろんな所へ行きましたが，僕はアフターケアが大事だということ。そこで，僕は誕生日にカード出せと言ったんだけど，これは実現しなかったですね。何か選び出すのが面倒なのか。でも何とかつなぎ止めたいと，クリスマスカードは過去の研修生全員に出すから，僕はそのサインだけでも手書きにしたいと言ったら，これがまた大変なんです。毎年人数がどんどん増えてくるから，サインするだけでも（笑）。

というのは，僕のいままでの経験で，例えばイースト・ウエストセンター。50年後のいまでもニュースレターとかそんなのが来るけど，最初の3年ぐらいまで，好きなアメリカの雑誌を送るというので，僕は『アメリカン・ジャーナル・オブ・インターナショナル・ロー（The American Journal of International Law）』を送ってもらいました。しっかりした高いものを。これを3年間か5年間送ってくれました。

もう一つはドイツのフンボルト財団。これも毎年，ニュースレターも来るし，カレンダーも来るし，例えば還暦祝いの手紙は来るし，もう帰国してから40年たっているのに。そういうことは僕は大事だと思う。ほったらかしは駄目だと。だからアフターケアをきちんとやろうということを言っているわけです。

それから，あとは難民の会議。もうこのごろは行かないけど，最初に行ったのはマニラのアジア難民専門家会議。ちょうど南ベトナムがやられてしまって，サイゴンの陥落が1975年かな。1975年の後でマニラで会議があった。そうしたらフィリピンでもバターンに難民キャンプがあって，見に行くと昔のベトナムの紙幣を七夕のかざりのように立てている。今では何の値打ちも無くなっているわけです。

それでそこの会議で，当時日本は1人とか2人しか難民を受け入れないというので，日本はどうだというわけでしょう。僕ももっと入れるべきだと個人的には思っているけど，そういう所に出たら，やはり日本の味方をしたくなって，日本は世界で一番多くの基金をUNHCRに出していると。元のUNHCRの，つまり高等弁務官は論文で，お金も受け入れと同じぐらい大事だと言っているというようなことを発言したわけです（笑）。味方をしたわけ。

そうしたら，あいつはいろいろ言いよったということで，ワーキンググループをつくるというのに入れられて，それで2回サンレモでワーキンググループの会議をやった。サンレモというのは，ニースからモナコを通って行くんだけど，ノーベル賞のノーベルが昔，別荘を持っていた。ヴィラ・ノーベル。そこが世界人道法研究所というのに，いまなっている。そこで2回ぐらい会合を持ちました。

千里金蘭大学時代

川島　それから金蘭に来た時に一つだけあるのは，僕が金蘭で4年制女子大を立ち上げ，最初の学部は管理栄養士をつくる学部。それで金蘭は女子教育で100年やってきたというので思い

ついたのがアフガニスタン。

アフガニスタンは，タリバンの時は女の子が学校へ行くなんてとんでもないことで，家にとじこもっていなければいけない。それで，やっと女子教育を復活する時だということと，東京でアフガン復興会議をやった時，もちろん栄養という面も重点事項に挙がっている。だからアフガニスタンから学生を２人，うちは女子大だから女子の学生を２人受け入れる。渡航費から生活費・学費免除，全部を金蘭の負担でということをした。それで１年間日本語をやって，あと４年間面倒をみる。それを国際貢献でやろうと。

ちょうど阪大の人科（人間科学部）の先生が，教育復興のためにアフガニスタンへ行っておられた。それで話をして，カブール大学というアフガニスタンの東大みたいな所の学生を取ろうと。それでカブールに行った。行く前に毎日新聞と話を付けて，記者とカメラマンが付いてきて，ずいぶん記事にもしてくれました。最初は一面で扱ってくれましたね。ともかく，そんなことを金蘭ではやっていました。

中尾　いまも続いているわけですか。

川島　いやいや，それは１回だけです。

帝塚山大学時代

川島　それから，僕が一番忙しかったのは，帝塚山へ阪大を辞めてすぐに行って，その前に「世界青年の船」に行って，だから最終講義はしていないわけです。

中尾　先生はされなかったんですか。

川島　1月20日から3月20日まで2カ月間太平洋を一周していたので。それで帰ってきて，うわっと部屋を片付けて阪大を飛んで出た。

中尾　それで帝塚山へ。

川島　はい，帝塚山へ。それで同じ時から国際交流基金関西国際センターでしょう。それでちょっとたってから，アジア太平洋人権情報センター。これは一般に「ヒューライツ大阪」と呼ばれている。そのころが一番，三ツ股かけて，まあしんどかったですね（笑）。

それで，ヒューライツでは人権教育を一生懸命にやってユネスコから表彰されたでしょう。ちょうどフランス大使だった松浦晃一郎さんが事務局長になった時で，表彰式をドイツのニュールンベルクでやるというので行った。それで表彰してもらったんだけど，これも面白い話がある。もうしないけどね。そういうこともありましたね。

ただ，もう橋下（徹大阪府知事）になってから駄目ですね。府と市で助成金をもらっていたし，人も来てもらっていたけど全部引き揚げ。何もない。だから，いまはまた小さな事務所に移ってな。そういう文化・人権は全部アウト。こういうものは成果が目に見えない。いまのような成果主義の時代には，これは一番どうにもならないですね。どんな成果があるんだと言われたら，そんなのは何年かたってみないと分からない。

中尾　しかも，こういうふうにいったん途切れてしまうと難しいですね。

川島　そう，途切れたら駄目なんですよ。まあ，何とか続いてはいるんですが。

中尾　帝塚山の法政策学部ですが，それは先生がつくる際にかかわっておられないんですか。

川島　だから，元阪大経済学部の小泉（進）さんが帝塚山におられた。それで法律系の学部をつくるということになった。ちょうどOSIPPの研究科長の部屋がニ号館にあった。天井の高い，だだっ広い所だったけど，そこへ小泉さんが来て新学部をつくるのを手伝ってくれと。「ちょっと考えさせてもらいます」と言ったら，「あかん。いま即答」と（笑）。

阿部　法学部ではなく，法政策学部と「政策」を付けられたのは，国際公共政策研究科の場合と同じような理由があるのですか。

川島　やはり一般的な傾向として，近くの大学

に法学部があったので，法学部ということではなかなか認めてもらえないというのがあった。名称はいろんな候補が出ましたよ。法実務とか何とか，そんなのもいろいろあったけど。

それで僕は一人ではちょっと難しいからと考えて，ちょうど学会で一緒だった国際私法の曽野（和明）という北海道大学の先生を昔から知っていたから，彼を引っ張りこんで，あとは松岡（博）さんとか，商法の江口（順一）さん，憲法の伊藤（公一）さんとか，そんな人たちをやがてみんな取り込もうとして，何年か後にはお３人とも来てもらいました。

もう一つ僕は阪大最後の１年は，いまでもやっているのかな，教養で新入生に対する何かセミナーのようなもの。

中尾　ああ，やっています。

川島　やっていますか。あれを僕が最後だから受け持つと言って受け持ったんだけど，それで講読をやったんだけど，全然反応がないんですね。

中尾　１年生，いわゆる教養セミナーに出られたんですね。

川島　はい。もう，この学生たちは阪大へ入るだけで疲れはてているのかなと思って。だから，僕は帝塚山へ行くのがものすごく楽しみになってね。いままで勉教をしてこなかった人を教える楽しみがあるじゃないかと（笑）。これから，ちょっと勉強でもしようかという人を教えるほうが面白いんじゃないかと思って行ったら，そうでもなかった（笑）。

中尾　受け持たれたのは前期ですか，後期ですか。

川島　どっちだろう，覚えていないですね。

中尾　私も前期に何回か持ちましたけど，やはり入ってくる年にもよるんですが，法学部の学生をピックアップしてやりましても，結局，受験勉強しかやっていないので，岩波新書ぐらいの社会科学関係の本なども全然読んでいない。新聞も読んでいないし，だから世の中はどうなっているんだということもわからないぐらい（笑）。

テキストを決めて，五つのグループに分けて報告をさせるのですが，まとめてくることはまとめてくるのですが，それを議論するための論点をつくってきなさいと言ったら，○×のような質問なんですね。賛成か反対かというような，そんなの設問では議論できないんです。

川島　だから教養から始めないと，専門の講義をしてもね（笑）。

阪大生へのメッセージ

中尾　もし，ほかになければ，最後に阪大生にメッセージとか。

川島　メッセージって，気の利いたようなものは何もないんです。僕はさっき言ったけど，つまりどんな学生にメッセージを出すかという話になるんですが。それで考えると，先ほども言ったように法と現実の乖離。だから，いまは大学は教育機関だと，大学生に対しても教育しなければいけないんだと。そうしたら，その教育しなければいけない人に対するメッセージかと。

それで僕がちょっと思い出したのは，昔ある所で外国の先生と雑談をしていた時に，一般に教育の目的とは何かということになった。教育というのは何をするんだという話をしていると，ある先生は，教育の目的はGood Citizenをつくることだと言ったわけです。日本語で言えば，善き社会人なのかな。善き社会人をつくると。善き社会人って，どういう人で，どうしたらいいのかな。善き社会人か，Good Citizenか，そうか，そうかと，その時はそのままにして長い間たっていたわけです。

そうしたらある時，これは僕自身の経験ではないけど，人の話を聞いたら，その人がインドへ行ったんだと。インドでいろんな学校を回っていて，中学校かどこかへ行って，ある女の子

に「あなたは将来何になりたいか」と聞いたら，“Good Citizen”と言ったんだと。「グッドシチズンと言っても，グッドシチズンになるためにはどうしたらいいの」と聞いたら，“to respect others”と言ったと。直訳すれば他人を尊重するというのかな。

それで，僕は教育と言うのはそういうことなのかなと。つまり“respect”というのは尊敬とか尊重だけど，もっと広く言えば，おもんばかるということですね。他人のことをおもんばかる，考慮する人間だと。それがグッドシチズンなんだと。人間というのは社会的動物だから，自分のことばかり考えて他人のことを考えないようでは，きちんとした社会人とは言えないと。“others”って他人だけど，それをもう少し敷衍（ふえん）したらほかのことですよね。人間だけではなくて，そのほかのいろんな社会のことについても考えを及ぼすと。思いを抱くというのかな。

だから，それが教育だったら，いまの学生にも言えるのではないかなと思います。“to respect others”，他人，他の事柄，あるいは世間を広く，視野をもっと広く持って，人だけではなくて，いろんなことに対して関心を持って，思いをそこにもっていくと。自分のことだけで決めようとしない。そういうことがメッセージかなと思っているんですけどね。

川島慶雄名誉教授略歴

1934 年 3 月	大阪府に生まれる
1953 年 3 月	大阪府立住吉高等学校卒業
1957 年 3 月	大阪大学法経学部卒業
1959 年 3 月	大阪大学大学院法学研究科修士課程修了
1965 年 4 月	大阪大学大学院法学研究科博士課程単位修得退学
1965 年 5 月	大阪大学助手法学部
1967 年 4 月	大阪大学助教授法学部
1977 年 4 月	大阪大学教授法学部
1971 年 8 月	大阪大学評議員（1983 年 7 月まで）
1983 年 5 月	外務事務官（条約局）併任（7 月まで）
1991 年 4 月	大阪大学法学部長（1993 年 3 月まで）
1994 年 4 月	大阪大学大学院国際公共政策研究科長事務取扱（6 月まで）
1994 年 6 月	大阪大学教授大学院国際公共政策研究科
	大阪大学大学院国際公共政策研究科長（1996 年 3 月まで）
1997 年 3 月	大阪大学停年退職
1997 年 4 月	大阪大学名誉教授
	帝塚山大学教授（2003 年 3 月まで）
	帝塚山大学法政策学部長（1999 年 3 月まで）
	国際交流基金関西国際センター所長（2005 年 4 月まで）
2000 年 7 月	アジア・太平洋人権情報センター所長（2007 年 4 月まで）
2003 年 4 月	千里金蘭大学長（2007 年 3 月まで）
2004 年 1 月	金蘭短期大学長兼任（2007 年 3 月まで）
2007 年 4 月	千里金蘭大学名誉教授

Memoir of Osaka University talked by Professor Emeritus Yoshio Kawashima

Toshimitsu Nakao, Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Professor Emeritus Yoshio Kawashima related to the history of the Faculty of Law and the Graduate School of International Public Policy (OSIPP) at Osaka University. Professor Kawashima, who was born in 1934, studied law at the newly established Faculty of Law and Economics and at the Graduate School of Law at Osaka University under the guidance of Professor Niemon Obuchi. Thereafter, at the Faculty of Low of Osaka University Professor Kawashima was appointed Assistant Professor, and promoted Associate Professor, and finally became Professor in 1977. In 1991-1993 he worked as Dean. His specialty was international law, and he made a wide human network not only in Japan but also in foreign countries. Professor Kawashima made great efforts to establish OSIPP in June 1994 with President Kanamori, Professor Shoichi Royama of Faculty of Economics and so on, and served the first Dean of the school in 1994-1996. He became Professor Emeritus in 1997, and later in 2003-2007 worked for Senri-Kinran University as the first President.